

Title	安定均衡の経済表に就て：ウーグ博士の フランソワ・ケネーの経済表 を中心として
Sub Title	Tableau economique in equilibrium concerning mainly "The tableau economique of François Quesnay" by Dr. H. Woog
Author	渡邊, 建
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.2 (1957. 2) ,p.118(46)- 132(60)
JaLC DOI	10.14991/001.19570201-0046
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570201-0046

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

安定均衡の經濟表に就て

——ウーグ博士の『フランソワ・ケネーの經濟表』を中心として——

渡邊 建

マルクス Karl Marx は一八六二年六月十八日附のエンゲルス Friedrich Engels 宛の書簡に「若し貴君を煩はすことなく極く簡単に出来ることだつたらイタリアの簿記範例(説明つき)をお願ひし度い、ドクトル・ケネーの検討に必要なのだが」(Der Briefwechsel zwischen Marx und Engels, —Gesamttausgabe Bd. 3, S. 78)とケネーの學說の研究に着手することとなつたことを傳へてゐるが、それから約一ヶ年後の一八六三年の七月六日附のエンゲルス宛の手紙に同封された一葉の「マルクスの經濟表」にはその餘白にケネーの範式が書き添へてあり、この「同封した經濟表は私がケネーの表に置き換へたものだが、若しこんな暑さでも出来るなら丁寧調べて何か君の意見を述べて欲しい。それは總再生産過程を包含してゐるものでこの「私の表は私の著書の終りの方の一章に總括として掲げられるものである」(Der Briefwechsel zwischen Marx und Engels, Bd. 3, S. 149.)と述べてゐる。

斯くして經濟表が印刷されてから百年餘にしてマルクスによりて經濟學說史上に正しい位置に置かれることとなつたのである。而してマルクスの經濟表の研究は『剩餘價值學說史』に又エンゲルスの『反デューリング論』に發表せられて居り、經濟表の解説として最も秀れたるものとして認められてゐる。然しながら、マルクスの研究の對象となつたのは經濟表の範式のみであつて、その原表には及んでゐないのであつて、而もその範式に就てもケネーが遺した謎はそれが創案せられてから二百年近く、又日本に紹介せられてから五十餘年となる今日に於ても、未だ内外の研究者が一致した解釋に到達して居ないのである。

ケネー生誕二百五十年の昭和十九年に筆者は經濟表が「いづれも數字と點線とより形成せられてゐることから、先づ第一に、各表に使用せられてゐる數字の論據を「經濟表の生成發展」(昭和十九年の「三田學會雜誌」第三十八卷第二號掲載)に、第二に經濟表(原表)の機構の解説を「經濟表解説」(「三田學會雜誌」第三十八卷第三・四合併號掲載)に、第三に經濟表(原表)から範式への發展の過程と

範式の解釋を「經濟表の省略化と其範式」(「三田學會雜誌」第三十八卷第八號掲載)に企圖したのであるが、その以後經濟表の研究として、越村信三郎教授の『ケネー經濟表研究』(東洋經濟新報社刊行「現代經濟學叢書」第一卷(昭和二十二年—一九四七年))とウーグ博士の『ケネーの經濟表』(The Tableau Economique of Francois Quesnay—An Essay in the Explanation of its Mechanism and a Critical Review of the Interpretation of Marx, Bilimovic and Oncken, 1950)が發表せられた。

又坂田太郎教授は「讀まれることの少ないこの思想家(ケネー)及びその學派(重農主義經濟學派)」に就てはデール Eugene Daire やオンケン August Oncken の「ケネーの著作集」以後にバウエル Stephan (Etienne) Bauer やシネル Gustave Schelle によりて公表された諸「論稿を含む著作の周到な検討からはじめ直さなければならぬ」と考へられ先づ『ケネー經濟表以前の諸論稿』(昭和二十五年)を出版せられたが更に『ケネー經濟表』(昭和三十一年)の表題の下に經濟表に關するケネーの諸論稿を現在に於て可能なる最大限にまで、執筆の年代順に集めて邦譯せられて、ケネーの經濟表の構想の時間的推移を検討し「原作が名づけての難物」であるから、斯くその原態をつきとめた上に立つて經濟表諸表の構成の變化を探究せられ「矛盾は矛盾なりに、曖昧は曖昧なりに」譯者としての經濟表の解説を發表せられたのである。

社會的總資本の再生産及び流通に關する分析を研究する越村信三郎教授は『ケネーの經濟表の研究』にて、その「再生産の問題」に

とつて、より包括的な、より完成された形式をもつところの「範式」を分析し、その基礎の上で「原表の検討にうつること」(同書一〇頁)にせられたのであるが、ウーグ博士はケネーの經濟表とはデザグの機構の「原表」であつて、『經濟表の分析』の「公式」は經濟表の創案者ケネー自身によりて描かれた經濟表(原表)の解説のための一表式に外ならぬものであるとし、この公式(範式)を思考素材に使用して經濟表(原表)の機構の完全なる理解に達せんとするものである。故に博士は「範式」は經濟表の最終結論としてでなく、寧ろ説明のために介存する「手段と見做すべきであつて『經濟表の分析』という表題そのものが、その意味を簡明に表現してゐるものとするのである」。(「The Tableau Economique of Francois Quesnay」1950, p. 9)

坂田教授は「ただ漫然と原表と範式とを比較して、そのどちらかの優位を語つたりすることは當らない。たしかに社會的總資本の再生産過程を資本流通を介して、しかも貨幣流通を資本流通の契機として描こうとしたことは、範式の注目すべき特徴であるが、しかし原表とても、單に個別資本の動きを寫そうとしたものではない筈である。原表の場合もその狙いは社會的資本にある。ただそれは社會的總資本の單純再生産を生理學者らしく、ひとつの解剖學的斷面として、しかも社會的平均において、描こうとしたものに他ならない。(切斷面であるから、總過程をすべて表示することは無理なのであらう。)そう考へることが假りにできるとすると、原表こそは生理學者ケネーの構圖として適わしい構成をもつのであり、それこそが

筆者は地主・不生産兩階級へのその食料として賣却せる農産物の代金が生産階級のその年度の年投資となるものと解して、それを表の上部の年投資の位置へ移して、その一半が不生産階級へ支出されるものとして範式そのまゝの機構にて解説を試みたのである(「三田學會雜誌」第三十八卷第八號五三頁記載第七圖参照)。

又ウーグ博士の修正表に在りては不生産階級の投資は貨幣として範式と同様に記入されるが、博士が生産階級内にて消費せられる農産物三單位と解する生産階級の年投資は表示されて居ないこととなり、従つて又範式の如く農産物の再生産額五單位も記入されて居ないのである。

四 流通する貨幣額に就て

ウーグ博士は『經濟表の分析』の本文の説明を表式化する三邊博士の解説表や久保田博士の解説第二表の如く、地主階級の所得と不生産階級の投資との總額三單位の貨幣量を以つて範式の循環過程を説明するのであるが、マルクスは、ケネーが不生産階級の投資として「十億の貨幣を金庫に有するといふ事を説明の便宜から假定する」もこの製作品の賣却からでなく、その金庫から自ら流通に投じたところの「十億の貨幣」は「流通過程以前に存在してゐる元本から流通過程に投じたものであるが」それは流通過程に於て直ちに不生産階級に逆流して来るから、この額を不生産階級が生産階級に貨幣で支拂つたのは「今や無駄であつた様である」として、その解説には貨幣量を二單位とする(本稿第三圖参照)。「パウエルの修正表」、又それと同様の『經濟表の分析』の要約を表式化する久保田博士の解説第三表にありても、その貨幣量二單位にて足るものとす

るが、ケネーは一國所要の貨幣量を農業の純収益額即ち地主階級の所得額に等しき額を以つて足ることを常に主張してゐる。『經濟表の分析』と同時に發表せられた『重要考察』の第七に「流通正整に行はれ商業が信用と充分の自由とをもつて行はるゝような農業國にあつては、地主の収入に等しき保有貨幣で十分に餘りあるものと考へられる。」(Curves, p. 325.)とし、その註の中に「一國民はその収入に應じてのみ貨幣を有すべきである。それより多き量はこの國民には不用である。」(Curves, p. 328.)ことを注意してゐる。従つて筆者は範式の解説に、その循環する貨幣總額を地主階級の總所得額に等しい二單位、略式にては二千リーヴル、範式にては二十億リーヴルとして、經濟表(原表)に循環する貨幣額と矛盾なく統一され得るものとした(「三田學會雜誌」第三十八卷第八號五八頁以下参照)。

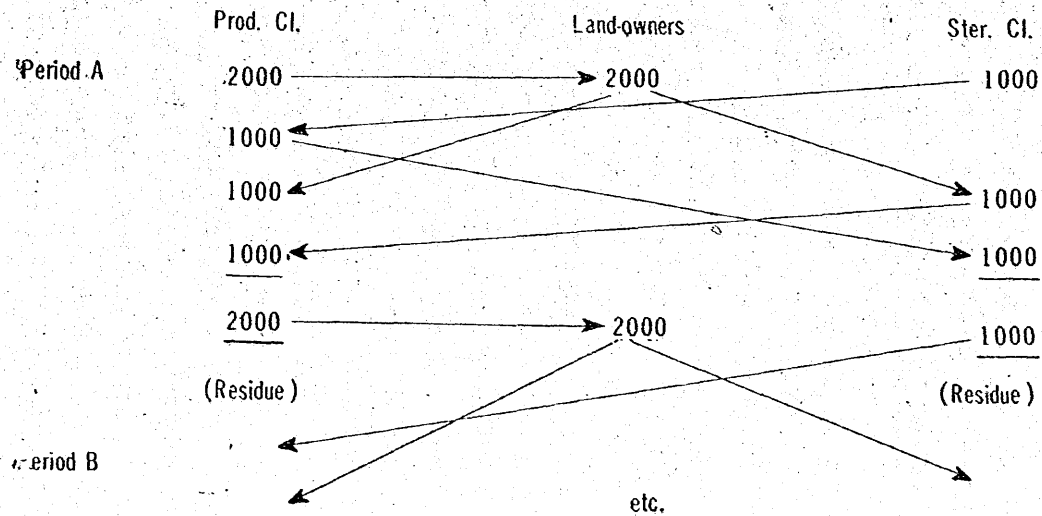
三

ウーグ博士はこの範式の解釋の上に立つて經濟表(原表)に就てのオンケンの解説を検討し、生産階級の原投資の利子を考察することによりて、農産物の年々の再生産額を五單位、略式にては五千リーヴル、範式にては五十億リーヴルとし、不生産階級は年投資としての貨幣一單位、略式にては一千リーヴル、範式にては十億リーヴルを支出して、工業の製作品の原料とする農産物を購入し、斯くて二千リーヴルの製作品を製造し得、又生産階級も亦、地主階級に納付すべき貨幣二單位、略式にては二千リーヴル、範式にては二十億リーヴルを保有し得ることとする(「Ibid.」, p. 60—62.)。

安定均衡の經濟表に就て

第五圖

ウーグ博士の「修正せられたる範式」



斯くして、ウーグ博士は經濟表(原表)に表示されてゐない過程として先づ、生産・不生産兩階級の同一階級内への支出を描き加へ(「Ibid.」, p. 73.)次に不生産階級の投資の生産階級への支出過程を更に加へて「完成せられたる原表」(Questenay's "Tableau économique" completed according to the data supplied by Formule を掲載する(「Ibid.」, p. 75: 本稿第六圖)。

このウーグ博士の「完成せられたる原表」を解説するに、(a)行は不生産階級の年投資の生産階級への支出せられた二千リーヴル(b行)の一半が原表の支出秩序によりて生産階級内に支出せらるゝを表示したものであるが、これは一應は二分せられるも結局全額製作品購入のために不生産階級に支出されるものとなす(e行へ)。

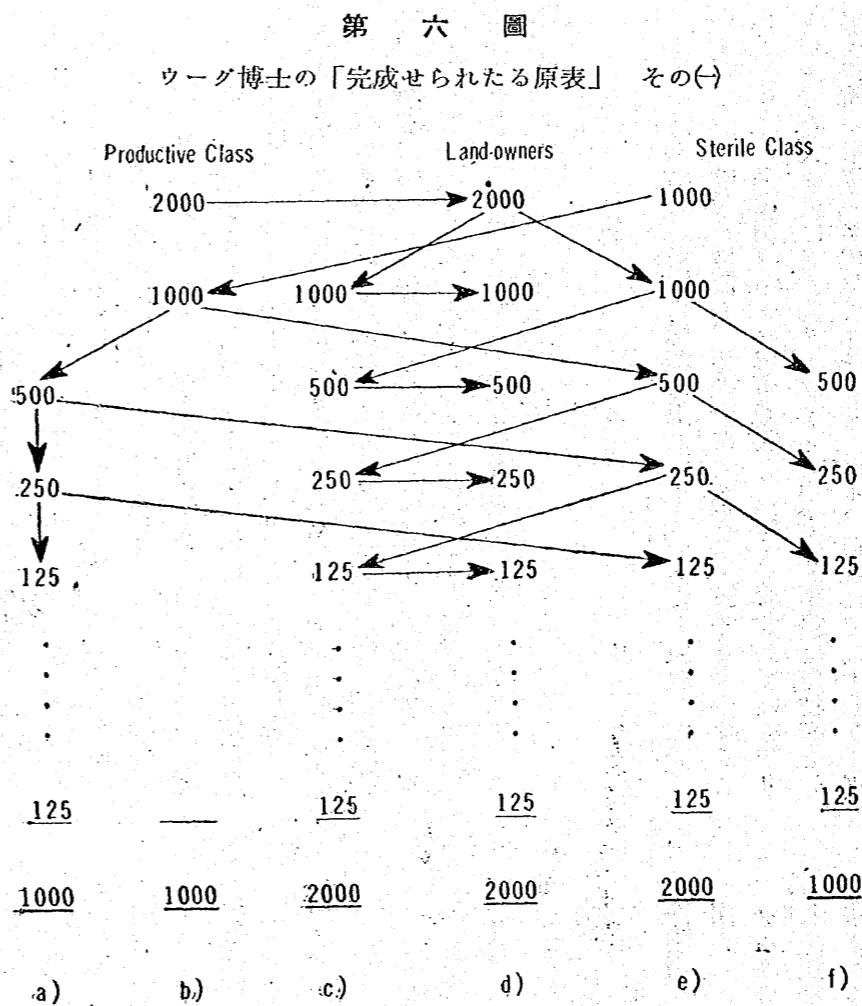
(b)行は不生産階級の年投資(貨幣)一千リーヴルが生産階級へ農産物の代金として支出せられたものであるが、その一半、五百リーヴルは製作品の代金として直ちに不生産階級へ、又他の一半は生産階級へ支出せらるゝも(a行へ)、それも亦、不生産階級へ支出されるものとする(e行へ)。この過程に於て農産物一千リーヴルは貨幣となり、それは更に不生産階級にて製作品に轉形され生産階級に購入されて、その原投資の利子としてその修復に使用されるものとする。

(c)行は地主・不生産兩階級より支拂はれた農産物の代金であるが、ウーグ博士は、これは生産階級に保有せられ、次年度の當初に、地主階級へ納付さるべく中央(d)行に記載されるものとする。この過程によりて純收穫の農産物二千リーヴルが貨幣の形態となりて、

生産階級に保有され得るのである。

(d)行はウーグ博士には、地主階級に納付すべく流過程過より控除されたる貨幣二千リールと解せられる。

(e)行は地主・生産階級より支拂はれた製作の代金であるが、それ



は原表の支出秩序によつて、いずれも、その一半は農産物の代金として生産階級へ支出され(e行へ)他の一半は製作品の代金として生産階級内に支出される(f行へ)。この過程に於て製作品二千リールは全額貨幣となり、更にその一半、一千リールは食料とする農産物となり、他の一半、一千リールは食料と生産階級の年投資の回収として、貨幣の形態にて保有せられるのである(f行へ)。

(f)行は不生産階級の製作品購入のために階級内に支出せられた貨幣であつて、それはこの階級の年投資の回収として保有せらるゝ二千リールである(ibid., p. 78-81.)

このウーグ博士の「完成せられたる原表」には不生産階級が製作品の原料購入のため支出した年投資一千リールと、地主・不生産階級の食料として賣却せる農産物の代金二千リールとは、いづれも生産階級が受け取るものとしてあるが、ウーグ博士はこの農産物賣却代金三千リール(bとc行)の中間を製作品購入のために不生産階級に支出し、又いづれを地主階級に納付すべく保有するかは問題でないとし(ibid., p. 79.)その「完成せられたる原表」(ibid., p. 75: 本稿第六圖)には、不生産階級へ製作品の代金として支出する貨幣は不生産階級より製作品の原料とする農産物の代金として

支拂はれたるものであつて、地主階級へ納付すべく保有する貨幣は地主階級より農産物の代金として受領するものとするが、同書七四頁に記載される表式(本稿第七圖)には、不生産階級へ支出する貨幣は地主階級へ賣却せる農産物の代金であり、又不生産階級の投資の生産階級へ支出せられた貨幣は、次に地主階級へ納付せられる一部として生産階級へ保有せられるものとする。

然しながら、ウーグ博士の「修正せられたる範式」(ibid., p. 57: 本稿第五圖)との関連に於ては「完成せられたる原表」(本稿第六圖)が適當であり、又原表を總括せる『農業哲學』の略表には同書七四頁の表式(本稿第七圖)の方が関連が明らかである。

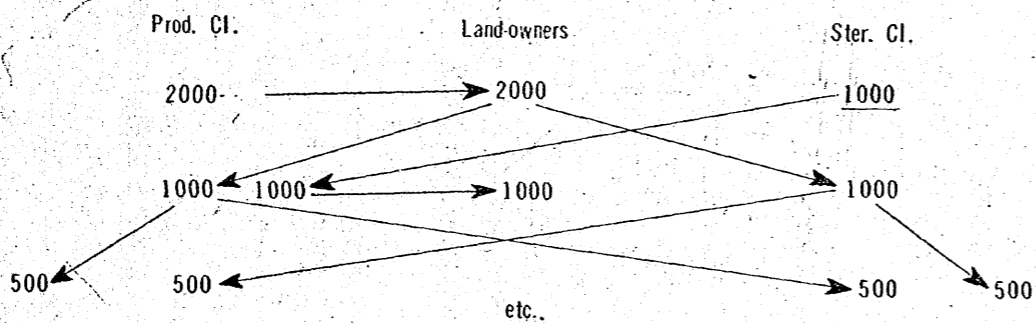
ケネーが原表に表示せざるものとする生産・不生産階級内の支出(a)を除き、更に原表には不生産階級に保有せらるゝとするその年投資の支出過程(b)を除けば、この「完成せられたる原表」はケネーの原表に還元し得るものであるとする。

更に、支出の細分過程を総括し、再生産さるゝ純收穫を除けば、それはウーグ博士の「修正せられたる範式」(ibid., p. 57: 本稿第五圖)に一致するものである。

斯くてウーグ博士は範式に表示せらるゝ過程を考察することによりて原表は完成し、ケネーの處論は悉く表現し得、然も亦、經濟表(原表)と『經濟表の分析』の範式との関連が明瞭となるものとする。

第七圖

ウーグ博士の「完成せられたる原表」 その(二)



に就てなされたのではなくして、博士の「完成せられたる原表」と「修正せられたる範式」に就て論ぜられたものであるから、先づこの二つの表式の検討を試みることにする。

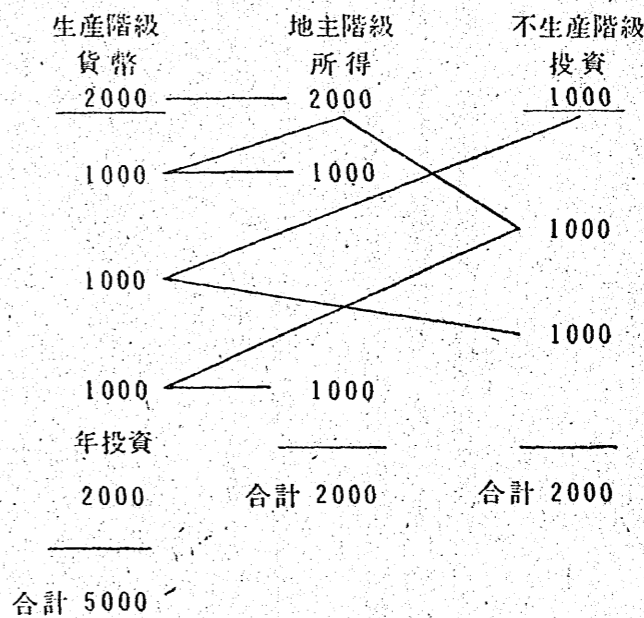
ウーグ博士の「完成せられたる原表」(本稿第六圖及び第七圖)の支出の細分過程を総括し、さらにそれを範式と比較するために階級内の支出を除去し同じ秩序に配置すれば、本稿の第六圖は第八圖となり、それはウーグ博士の「修正せられたる範式」第五圖となるのである。また第七圖は第九圖となり、再生産せられる純收穫を除けば、『經濟表の分析』の本文によりて描く三邊・久保田兩博士の解説表に近いものとなる。

四

ウーグ博士のこの結論はケネーの經濟表(原表)と範式そのもの

安定均衡の經濟表に就て

第八圖
ウーグ博士の「完成せられたる原表」
その(一)の總括修正表



(一) 生産階級の年投資に就て

この二つの表示に於て明かであるが、ウーグ博士の解説は不生産階級の投資の支出は表示するも、生産階級の年投資の支出に就ては範式の如く表示されてゐないのである。ウーグ博士の「完成せられたる原表」に又「修正せられたる範式」に、ケネーの原表や範式の生産階級の年投資の位置に記入されてある等しい額の数字は一見、その年投資の如く誤られ易いが、その解説によればそれは地主階級に納付せられる貨幣であつて、その年投資でないことを注意せねばならないのである。これを生産階級の年投資とすればビリモヴィッ

チの解説 (Ibid., p. 48, p. 49: 本稿第一圖、第二圖) の如く、生産階級の年投資も貨幣となり、それが地主階級へ納付せられてその所得となるものと解せねばならぬこととなる。
ウーグ博士は生産階級の年投資は、その階級内で消費する農産物であると解するが、それはこの二つの解説表 (Ibid., p. 57, p. 75: 本稿第五圖、第六圖) には表示されてゐないのであるが、範式との差異を明かにする意味に於て、その二表式を總括し、修正する本稿第八圖、第九圖には末端に農産物再生産總額と共に年投資として別に書き加へて置くこととしたのである。

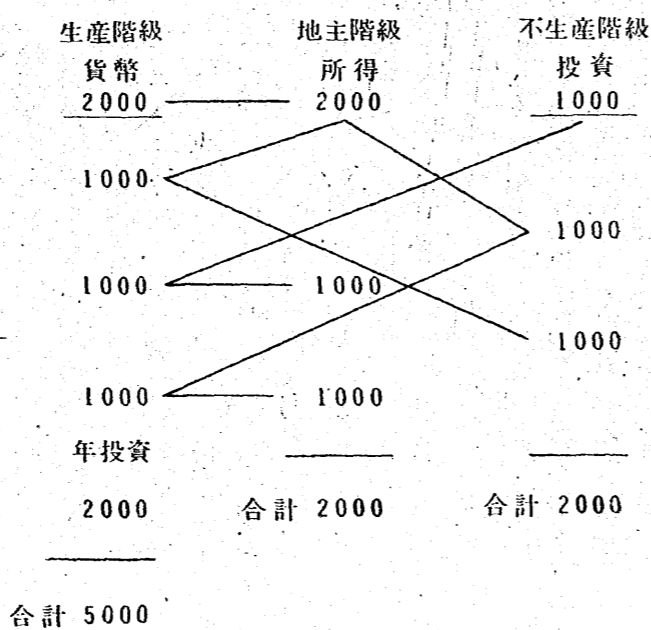
ウーグ博士の解説表式の中央に表示せらるゝ額は生産階級が農産物の賣却代金の中から次に地主階級に納付すべく流通より控除せる貨幣額と解せられ、その合計額が、年次に地主階級に納付せらるゝ一過程として表示されてゐるのであるが、ケネーは経済表(原表)に生産階級の年投資と地主階級の所得とを點線にて結びその間に「その生む純収益」と註記し、又表の中の階級間の支出過程に於て農産物の賣却代金として生産階級が受領する貨幣はいづれも、年投資となり、その十割の「再び生む純収益」を表の中央に記載して居るのである。第二版の「経済表の説明」は「小作人によつて耕作に使用された年投資六百リールを以つて農夫が前年度に生ぜしめた所の純収益の賣却は所得六百リールの支拂を地主に與へる(本稿の場合この数字は二千リール)」(Ibid., p. 1: 岩波文庫『経済表』一八頁)とし又「所得の中、経済表の秩序に於て生産的支出に移つて行つた三百リールは其處へ貨幣で投資を齎らし、それが地

主の所得の再生産の一部を成す所の純収益三百リールを再生産する。而して所得總額は此の同じ階級に歸來する金額の分配の殘餘によつて年々再生産される。(本稿の場合この数字は二千リール)」(Ibid., p. 11: 岩波文庫『経済表』二〇頁)とし、斯くて生産階級の年「投資六百リールは此の階級が地主と不生産階級とに對して行ふ賣却によつて貨幣を以て此の階級に齎らされる。(本稿の場合この数字は二千リール)」(Ibid., p. 11: 岩波文庫『経済表』二一頁)ことを明かにしてゐる。更に又自國産食料品の消費の増加によつてより多くの貨幣が生産的に支出されるならば、生産階級の年投資の増額となり、その純収益は増大し、従つて地主階級の所得増加となることを説いてゐるが (Ibid., p. 1: 岩波文庫『経済表』一九頁) それは更に『経済表の分析』に於て「若しも地主がその土地を改良し、その収入を増加せんが爲に、不生産階級へよりも生産階級へ、より多くの支出をなすとすれば、この生産階級の仕事に使用さるゝ支出の増加はこの階級の投資の増加と看做すべきである。」(Euvres, p. 316: 岩波文庫『経済表』五五頁)とし、又その『重要考察』の第四の中に各階級の「支出が生産階級に回歸するか或いはこの階級から逃避するかに従つて支出が生産階級の投資を増加せしめるか、減少せしめるかに従つて」(Euvres, p. 320: 岩波文庫『経済表』六三頁)一國統治の良否の結果を知ることが出来るものと論じてゐる。
これ等の處論よりして、ケネーは他の階級に食料として賣却する農産物の代金が生産階級の年投資となり、その十割の純収益を再生産するものであるとあつて、又その半額が製作品購入のために支出

安定均衡の經濟表に就て

第九圖

ウーグ博士の「完成せられたる原表」
その(一)の總括修正表



せらるゝこととなるは経済表(原表)に在りても、又その生産・不生産兩階級間の等比較数的に細分せらるゝ支出過程を括約せる『農業哲學』の略表によつても明かに示めされてゐる。
生産階級の年投資に就ての説明はケネーの『経済表第二版の「経済表の説明」』は明かに『経済表の分析』よりもより満足すべきものであるが、経済表(原表)の機構に於ては、その年投資は前述の如く支出過程の中に紛れて見失ひ易いのである。
略式や範式に到つて、初めて投資はいづれも上部の投資の位置に抽出せられて、その位置より支出せられるものとしたのである。

五

(一) 經濟表(原表)の不完全さに就て

ケネーの原表が三つの社會階級間の相互支出の全過程を表示してゐないことはウーグ博士が指摘せられる通りである。

ケネーは第二版の『經濟表の説明』に「支出の秩序を餘りに複雑ならしめないうために、」生産階級の投資の利子を別個に考察して農産物再生産額をその年投資の二百パーセントの千二百リールとするが (ibid., p. iii; 岩波文庫『經濟表』二二頁参照)、この場合、

四千里リールであり、従つて不生産階級は製作品二千リールを賣却するも、農産物を購入するは食料とする一千リールに止め、残りの貨幣一千リールはその年投資の回収として保有するものとする。これは原表が生産階級の農産物の賣却による年投資の回収、それによりて再生産される純收穫——従つて地主階級の所得の再生産を中央に簡明に表示するを主眼とせるがためであつて、原表は原表としての價值があるが、社會三階級間の支出の全過程を、従つて又貨幣の完全なる循環過程を表式する範式こそ、經濟表の完成と看做すべきであろう。數字の細分のために廣い紙面を要する原表の機構は繁雜であり、又全國的數字をそのまま使用することは技術的に不可能である。従つて『農業哲學』には「省略せる原表」(ibid., p. 216, p. 217, p. 226)や、多くのデクザクの支出過程を「總括せる略表」(ibid., p. 44, p. 116, p. 146)が使用せられたが『經濟表の分析』や『農業哲學綱要』で「範式」の形式が完成せる後は、最早原表も略表も使用せられずして、ケネーは範式の表式によつて

『第一』經濟問題』や『第二經濟問題』を解いてゐるのである。

この原表の不完全さを補ふために、ウーグ博士は「完成せる原表」を作成して、表の上部に掲げられた生産・不生産兩階級の年投資の中で、不生産階級の年投資の支出のみ範式に於ける如く、農産物購入のために生産階級に支出すると表示する。原表の上部に掲げられた兩階級の年投資はいづれも前年度のものであつて、生産階級の本年度の年投資は「この階級が地主と不生産階級とに對して行ふ賣却によつて貨幣を以て此の階級に齎らされる」(ibid., p. iv; 岩波文庫『經濟表』二二頁)ものであつて、その一半は製作品購入のために不生産階級に支出されるのである。原表に在りてはこの過程は三階級間の支出過程の中にあるが範式や略式にては表の上に掲げられた年投資の支出として表示される。

不生産階級の本年度の年投資も生産階級に對して行ふ賣却によつて貨幣を以つてこの階級に齎らされるが、原表の表式する範圍に於ては年投資として留保しなければならぬものである (ibid., p. iii; 岩波文庫『經濟表』二〇頁)。不生産階級の年投資が原料購入のため、支出されるのはこの留保せられた貨幣が支出されるのである。「バウエルの修正表」はこの支出を支出の第三過程の二(3)として表示するが、斯くて、不生産階級は製作品賣却代金の總額を生産階級に支出することとなり、略式や範式に至つてこの過程が表の上部の投資の支出として明示されることとなつたのである。

それ故に筆者は不生産階級は製作品の賣却代金の全額を生産階級に支出するものとして「補足せられたる原表」(『三田學會雜誌』第三十八卷第三・四合併號一一二頁第二圖、同誌第八號三三三頁第四圖)

を描いたのである。更らにこの表の細分の支出過程を總括することによりて得た「補足せられた略表」(『三田學會雜誌』第三十八卷第八號第五圖)は「バウエルの修正表」(Economic Journal, vol. V, p. 17)と『經濟表の分析』の要約を表式化する久保田博士の第三表(『重農學派經濟學』六六―六七頁)と全く同一のものであり、その表示する内容は範式の流通と一致するものである。

「經濟表の分析」の要約に「右上には本年度の收穫を生ぜしむる爲に前年度に支出された生産階級の年投資の額がある。この額の下に、この年投資の額をこの階級が受けとる額の欄から區分する線がある。」(Euvres, p. 319; 邦譯岩波文庫本五四頁、全集二卷二四一頁、坂田譯本一四二頁)と範式の説明をするが、その年投資の支出に就てはその本文に就ても論及することがなく、生産階級は地主・不生産兩階級より受け取る農産物賣却代金三十億——この場合三千リールの内一千リールは不生産階級へ製作品購入のための支拂に用ひる (Euvres, p. 311; 邦譯岩波文庫本四八頁、ケネー全集二卷三一―三二頁、坂田譯本一三六頁)とするが、範式に在りては他の階級から受け取る賣却代金の内から直接支出せらるゝとせず上部の年投資から支出されるゝものと表示する。

而してケネーは既に第二版の『經濟表の説明』には生産階級は地主・不生産兩階級にその食料として賣却せる農産物の代金を本年度の年投資とし、その一半この場合一千リールを製作品購入のために不生産階級に支出することを述べてゐる (ibid., p. ii, p. iv; 邦譯岩波文庫本二〇頁、二二頁、坂田譯本二六―二七頁、二八頁参照)。従つて筆者は生産階級が受け取る賣却代金を範式の年投資の位置へ

引き上げた後に於てその年投資の一部が不生産階級へ支出せらるゝと解釋したのである。(『三田學會雜誌』第三十八卷第八號五三三頁第七圖)。

ウーグ博士はこの生産階級の年投資をその階級が消費する農産物として、従つてその支出に就ては解説せらるゝことがなく、只不生産階級の投資の支出のみに就て考察するのである。

經濟表(原表)に於ては不生産階級の年投資は製作品の賣却によりて回収されるも、それは原料購入のために保有せらるゝとするが (ibid., p. iii; 邦譯岩波文庫本二〇頁、坂田譯二七頁)、範式にては不生産階級の投資の額は十億であつて、それは原料の購入のため生産階級に支出される (Euvres, p. 310; 邦譯岩波文庫本四七頁、全集二卷二三―二五頁、坂田譯一三四頁)ものとして表式される。ウーグ博士は貨幣循環の開始より、地主階級の所得額の外に一單位の貨幣範式の場合十億、ウーグ博士の解説表にては一千リールを假定してゐる(本稿第四圖参照)が、筆者は製作品の賣却代金の一半が投資として回収され、それが投資として範式の投資の位置に引き上げて生産階級に支出せらるゝと解説したのである(『三田學會雜誌』第三十八卷第八號五三三頁第七圖)。

(二) 經濟表(原表)と範式の關連に就て

ウーグ博士は不生産階級の投資の生産階級への支出過程を補足することによつて經濟表(原表)を完成して、その範式——ウーグ博士が修正せらるゝ範式——への關連を求めてゐる。

然し、それは、本稿第八圖、第九圖に示す如くケネーの範式そのものへの關連ではないのである。

從來一般に經濟表は原表と略表(本稿の範式)との二種あるものとせられ、而も兩者はその記入する數字からも、その點線にて示める機構からも別個のものと考えられ、山口正太郎教授は「全體の上から此の兩者を矛盾なく其形式に於ても、内容に於ても、果又數字の上にも統一することは不可能である。」(『大阪商科大学經濟研究年報』第四號一頁)とせられたのであるが、地主階級の所得二千万リールを基本とする經濟表の原表と略表とを『農業哲學』に、又原表と略式(『經濟表の分析』の範式と同一機構のもの)とを『農業哲學綱要』に挿入、記載して居る點よりしても、ケネーやミラボー侯に在りてはいづれの表式も相互に何等矛盾するものではないことは明らかである。

故に筆者は、前年、佛蘭西の農業再建後の經濟的基本秩序を表式する經濟表諸表間の數字の根據を明かにし、その關係を求め(『三田學會雜誌』第三十八卷第二號)、次いで經濟表の原表から『農業哲學』記載の「省略せられた原表」と「總括せられた略表」(『Philosophie rurale』, p. 44, p. 116.)へ、更にそれを「補足せられた原表」と「補足せられた略表」に導き、『經濟表の分析』の範式へと到達せる過程を探つたのである(『三田學會雜誌』第三十八卷第八號)。坂田

教授はこれ等拙稿に就て「それぞれの段階を必ずしも發展の姿において把へえず、それぞれの表式を同時存在的に眺めて、それらに検討の手を加へてゐる。そこにここでの解説者の方針とあきらかに相違する點がある。」(『ケネー經濟表』八六頁)と批判せらるゝが筆者としては「數字と機構との兩面より經濟表を發展的に考察」(『三田學會雜誌』第三十八卷第八號七二頁)せんとしたものであつて、地主の平均所得四百リールを基本とする初版の經濟表の數字の論據を『穀物』論に算定する佛蘭西の農業再建状態に結びつけることによりて經濟表の生成の過程を、更に各經濟表の原表から範式への前提の推移と、原表から範式への機構の變化をケネーの構想の推移から探究を試みたもので、最初の論稿をこの意圖によりて「經濟表の生成發展」と題したのである。

その検討の結果、筆者は範式をもつて經濟表の完成と解するものであるが、尙、原表も略表も範式も夫々の前提の下に於て、相互に何等矛盾することなく、又同時に存在し得ると考へるものである。次の機會にウィグ博士の經濟循環不均衡の經濟表の研究を中心として當時の佛蘭西に於けるその實踐的性格の検討を試みることにする。

学 界 展 望

一九五六年下半期の國際經濟學
における二つの問題

白 石 孝

一九五六年下半期において、國際經濟學上二つの問題が殊に注目をひいた。一つは賠償支拂に關するものであり、他の一つは交易條件に關するものである。學會においても、アジア政經學會が「賠償とアジア經濟」という共通論題をかかけ、國際經濟學會では「經濟發展と外國貿易」の題目のもとで、交易條件の問題が扱われた。

賠償支拂については、既にビルマ、フィリピンに對する具體的問題をめぐつて、これまで多數の意見が述べられ、アジア問題第五卷第一號で「賠償問題と經濟協力」が特集されて、ほぼその論點をつくしている感がある。しかし、今日の賠償が東南アジアの開發に對する經濟協力を特徴とし、更にこれを通じて相手國との貿易擴大が望まれるかぎり、賠償の方式に論議が集中するのは當然である。

小島清氏の前掲誌上の論文「賠償と貿易擴大」並にアジア政經學會での報告は、これについて興味のある問題を提示するものであつた。即ち「日本の賠償支拂政策は、賠償輸出と商業輸出とを嚴別し、少くとも商業輸出を減少させることなく、いなそれをも増加させつつ賠償額だけは確實に追加的輸出増加をもたらそうというのである

一九五六年下半期の國際經濟學における二つの問題

る」。そのため「今まで輸出しにくかつた特定商品を受取るようにしはばりつけようとしている」。しかし、このような日本の獨善的意圖がうまく推移するものかどうか、「この獨善こそが新しい賠償支拂困難を生みつつあるのではあるまいか」。また「日本の賠償支拂政策が實物、役務賠償を固執することは、この拘束双務的トランスファー主義を貫かんとすることにほかならず、これは結局『小さな菓子』の大きさを分前を取る」ことで、現金賠償に近い方法で行つた場合に實現できるであろう『大きな菓子の公平な分前を得る』ことよりも、賠償請求國にとつては勿論、日本にとつても好ましくないことではあるまいか。これが小島清氏の根本的疑問であり、實物・役務賠償が現金賠償より好ましいとする考え方を批判する。しかも資本財賠償に拘束する方式には反對する理論的根據を明示する。

ケース(A)では資本財と消費財の自由選擇を、ケース(B)では資本財にのみ拘束した場合を扱い、その効果を比較する。まずケース(A)では、賠償請求國の經濟開發用投資Iは、 $m \cdot k \cdot p \cdot q$ だけの對日誘發消費財輸入と直接に $m \cdot k \cdot p \cdot q$ だけの對日資本財輸入をもたらす(II国民所得乗數、 m II 對日限界輸入性向、 p II 資本財輸入對日割合、 q II 投資中資本財輸入割合)。それは對日國際收支均衡においては日本からの賠償年額Rと對日輸出増加額Eに等しい。即ち、

$$m \cdot k \cdot p \cdot q \cdot I = R + E \text{ or } I = \frac{R + E}{m \cdot k \cdot p \cdot q}$$

ケース(B)では日本からの賠償年額は資本財に拘束されているから、開發投資による誘發的消費財輸入は専ら對日輸出増加分のみか